2009.JULY
あなたとFUJIを見つめるLIVE MAGAZINE

volume 32

Face to Face

〔フェイス トゥ フェイス〕
笑顔でつなぐコミュニケーション

横井 照子 富士美術館
館長 川口 知恵子
CHIEKO KAWAGUCHI

ロゼシアター
松竹大歌舞伎 一、「伊賀越道中双六」一幕 沼津
二、「奴道成寺」
オペラ 「ドン・ジョヴァンニ」

GOURMET
初夏を楽しむグルメスポットを
ご紹介します。

第4回富士山百景写真コンテスト
若手の写真家が活躍しています

Book information
初夏のひとときに
読書はいかがですか?

Smile3
増田さんのご家族を紹介します

Happy present
ゆらぎの里
入浴ペアチケット

星野新聞堂

Chieko Kawaguchi

気軽に誰にでも楽しんでもらえる美術館に

川口 知恵子
－かわぐち ちえこ－
横井照子 富士美術館 館長

ちょっとした文化人を自認する仲間が集まると『富士市にないもの』論議が始まることがある。静かに飲めるところがない、ナイト・カフェがない、オープン・カフェがない、大人の遊べるところがない、デート・スポットがない、素敵なお店がない、とそれぞれに日常生活の中で不満を感じているものがどんどん出てくる。『ないもの論議』は限りがないものだが、我々の生活を豊かにしてくれる施設の不備を指摘する声が多くあるのは事実だ。いわゆる都市のアメニティ（快適）機能といわれるものが不足していると言うのだ。富士川町と合併した新富士市の人口は約26万人だが、全国の同規模の都市と比較すると、なるほどと納得する事もある。そんな中でよくあげられるのが美術館である。富士宮にはかつて本格的な富士美術館があったが、宗教法人の移転に伴い2008年5月に閉鎖されて以来、このエリアには公設、私設を問わず常設美術館は存在しなかった。そんな文化的空白を埋めるように2008年秋に『横井照子・富士美術館』は開館した。

富士市中野464番地、東名富士インターから約5分、西富士道路の側道から伝法沢沿いを北に上がった高台に『横井照子　富士美術館』はある。白を基調とした外観と円弧を描く丸屋根が特徴的な建物は道路から少し奥まったところに位置し、伝法沢から続く竹林を背景に清楚な佇まいを見せている。名前を冠したとおりスイス在住の洋画家『横井照子』画伯のオリジナル作品を常時数十点、展示している私設の個人美術館である。

取材に際し予め電話を入れていた事もあり、館長の川口知恵子さんは玄関ポーチまで我々を出迎えてくれた。川口さんのとても落ち着いて上品な物腰に展示室に繋がる扉の向こうにある未知の作品への期待は一層高まった。絵画の知識が乏しい筆者は恥ずかしながら横井画伯に付いては殆ど情報を持ち合わせていなかったが、先ずは素敵な川口さんが惚れ込んでいる横井画伯である。その作品を肌で感じてみようという気持ちで展示室に続く扉が開くのを待った。

そこで目に飛び込んできたのは大きな壁を占領する14枚の連作『ソネット』であった。1枚でも完結しているのではないかと思う程エネルギーが詰まった作品が14枚横に連なっている。圧倒的な横方向への広がり。題材が横方向へ連なり展開してゆく様は事象の流転を表現しているのか、或いは起承転結を表しているのか？

川口さんによれば、この作品に限らず横井さんの作品はこの様な連作が多いと言う。この『ソネット』を展示する為にこの大壁が作られ、そこから美術館のサイズが決定されたと言う。事実、美術館には他にも見事な連作があった。

どうして富士に美術館を建設しようと思ったのですか？

この様に特定の作家に惚れ込み、その作品を最適に鑑賞できる空間を演出する。作家にとって川口さんはこの上ないよき理解者であり、支援者であろう。その点を川口さんにお聞きすると、

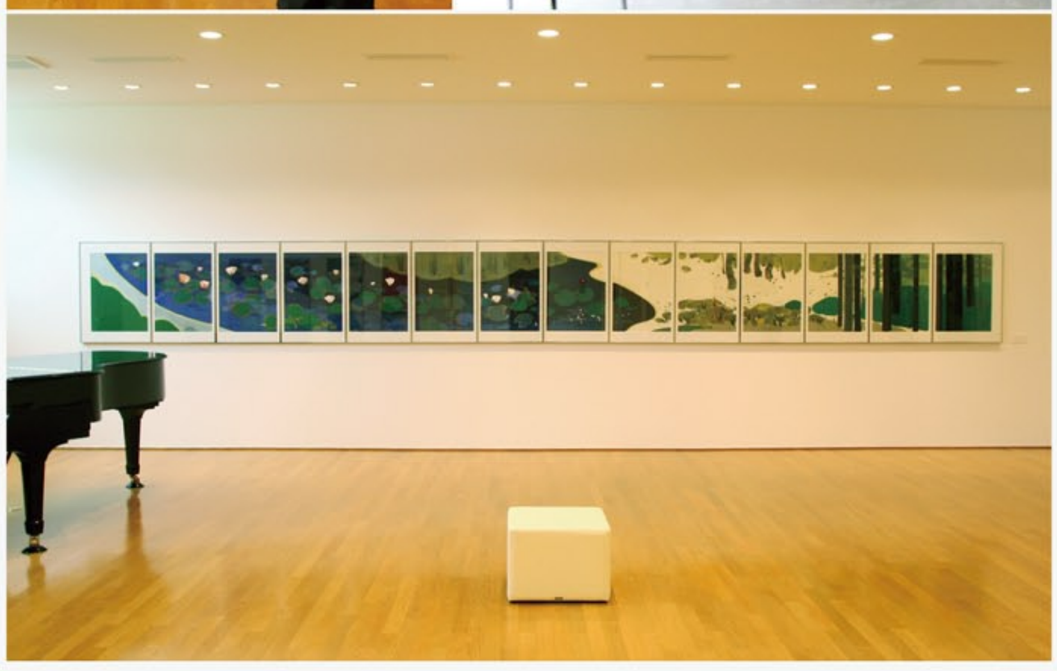
「祖父の代から富士市で事業をさせて頂いており、以前から何か地元に恩返しが出来ないものかと家族で話し合っていました。手元には長年に渡り収集した横井さんの作品がある。それらを一堂に会し皆様にも見てもらおうと、5年前にロゼ・シアターで個展を開催しました。その際に『なんでこんな素敵な作品が富士市に』と感動のあまり涙まで流される方がいらっしゃいまして、美術館の建設を考えるようになりました。」

横井画伯との出会いは？

「随分前になりますが、主人の父母の友人でスイス人の方が日本に来た時に、スイスで活躍する日本人画家がいて名古屋で個展を開いているから一緒に行かないかと言う事になり、出向きました。そこで初めて横井さんの作品に接し感動を覚えました。そしてその連作を譲って頂く事に致しました。それが縁で横井さんと交流が深まり、母は一緒に旅行などにも出掛ける間柄になり、現在では家族ぐるみでお付き合いしています。」

「横井さんの作品には音楽が流れています。リズムというか情感というか、彼女独自の世界がある。好みはあるでしょうが、きっと見て頂ければ感じて頂けると思います。また私は作品だけでなく、横井さんの生き方、考え方にも共感を覚えます。サンフランシスコ講和条約が発効された翌々年（1953年）、横井さんは当時28歳、英語も話せないのに独自の画風を求め単身で渡米しました。その後50年以上も海外で活躍していま

横井画伯（左）と川口さん
横井照子 富士美術館にて



常設展示室 12メートルの壁に9メートルの大作「ソネット」を展示。
スタインウェイのグランドピアノがあり、コンサートを企画予定。

す。私には考えられない。その行動力に今でも驚かされます。作品に関しては飽く無き挑戦を続け自分にはとても厳しいわけですが、反面人に対するやさしさは忘れない。そんな横井さんの生き様を表現した美術館です。ぜひ一度ご覧になって下さい。」

横井さんには絵画以上の刺激をもらいました。

美術館は設計段階から横井画伯の意向が多く取り入れられていると言う。特に環境問題に関しては多くの示唆を頂いたそうだ。

『とにかくエコを重視しなさい。屋根にはどんなに費用がかかっても太陽光発電を付けなさい。雨水は貯めて花の水やりに使いなさい。トイレに紙タオルを使うなどもってのほか。コーヒーも紙コップは使用しない。一人一人が気をつけないと大変なことになる、子供達の将来の為、それが私達の義務なのよ』と言われ、ヨーロッパとかスイスがではなく、昔の日本人が大切にしてきたものを現代の日本人はどこかに置き忘れてしまった事に気付かされたそうだ。

3人の子供を育て、経営者のご主人をサポートしてきた川口さんには新たに美術館の館長という社会的立場が加わった訳だが、川口さんは毎日がとても充実していると言う。様々な人と触れ合い見聞も広まったが、同時に自分の無知も知った。したがって今はもっと勉強したいと新たな意欲が沸き立っていると言う。

「花を持ってきて植えてくれる方、色々なアドバイスをくれる方、私は素人なので本当に皆様に助けられています。でも、今まで家庭では味わうことが出来なかった刺激を受けて、毎日が本当に楽しいです。皆様にはゆったりと寛いで頂ける、居眠りをしてしまうような美術館にしたいですね。主人も私が美術館に行くと言うと、『いいなぁ』と羨ましがりますよ(笑)。簡単なカフェ・コーナーもございます。カフェからは富士山が見えますし、まだ整備途中ですが竹林のある庭を眺めながら、ゆったりとした時間を過ごして欲しいのです。」

美術館のある街づくり。

確かに今まで、富士市には美術館がなかった。主な文化施設としては富士市立博物館、富士芸術村、そしてロゼ・シアターなどだ。常設美術館は富士山観光の表玄関と言う側面からだけでなく、多くの市民が生活に潤いを求め、自分の町に愛着を持つ上でも待ち望まれたものだ。また灰色の生産の町という富士市のネガティブなイメージを払拭する上でも多くの効果があるものと期待される。『横井照子　富士美術館』は私設美術館ではあるが、明らかに富士市の文化的な空白を埋めるだろう。そして『美術館がある街づくり』に表現される素敵なアメニティ・ゾーンの整備に繋がればよいと思う。美術館の周りには徒歩で『うなぎ』、『そば』、『和食』と本格的な食事を楽しめる飲食店もあり、休日をゆったり楽しむには充分な環境にある。川口さんにはここを美術館という枠に留まらず文化活動の拠点にしたいとの想いもあり、11月には大島妙子さん(ベルン在住・ピアニスト)のミニコンサートを企画している。今後とも『横井照子　富士美術館』に注目してゆきたい。

色彩の詩人　横井 照子　洋画家

1924年(大正13年)愛知県生まれ。幼少の頃より絵を好み東海美術展に入選。愛知県立津島高等女学校を卒業。1949年に上京し、木下孝則氏の指導を受ける。

1953年、まだ敗戦色が色濃い日本を後に単身渡米をしサンフランシスコの美術学校に入学。当初は前衛的な技法に馴染めなかったが、次第にそれまでの印象派風の具象から、セミアブストラクト(抽象)へと、画法が転換していった。その後、ニューヨークへ移り全盛期のアクション・ペインティングに出会う。ハンス・ホフマン、ジュリアン・レヴィ両氏の指導を受け、今日の横井さんの画法が確立された。

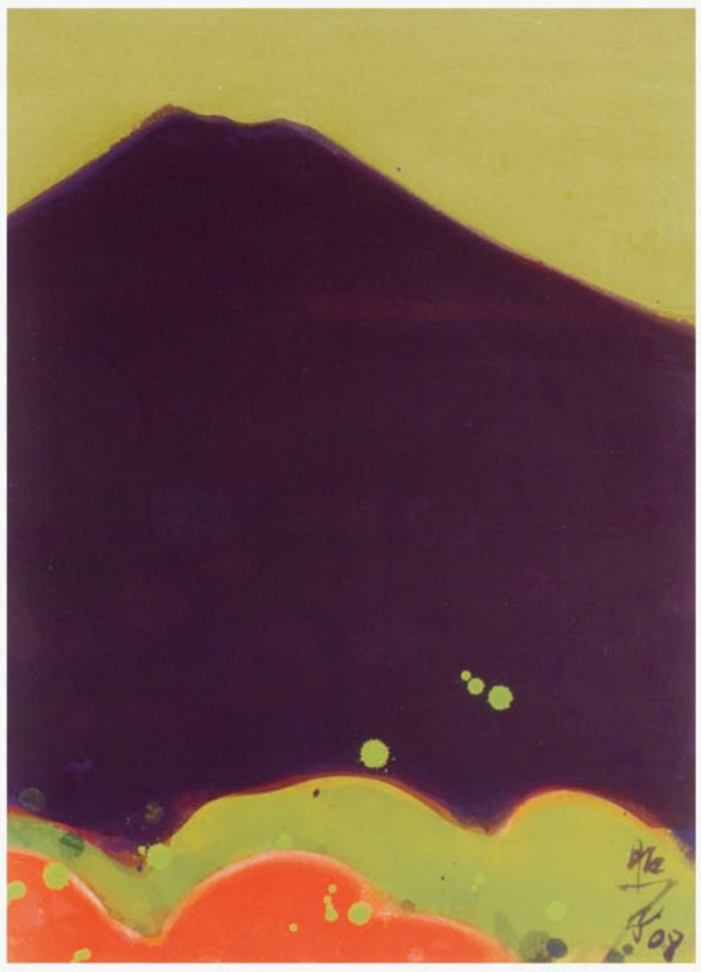
彼女の個展は開かれるたびに成功を収め、その後パリを経て1962年にスイス・ベルンにアトリエを構える。1991年にベルン市の市民権を獲得。スイスでは画家としての名を広く知られている。

横井さんの作品は日本の四季の美しさの像を強く表現している。うつろいゆく一瞬をとらえ、その瞬間のリズムや雰囲気、自然によって呼び起こされる感情を、色彩の重なり合いの面で再現をする。

また「色彩の詩人」と称される横井さんは、日本語の美しい語彙からもイメージを得て創作する。与謝野蕪村、藤沢周平、池波正太郎、新田次郎、など様々な書籍を愛読。

「私は絵も好きだけど、子どもの頃から本も好き。日本語は語彙がとても豊富。雨を表現する単語だけとっても、氷雨、春雨、梅雨、夕立、時雨、みぞれ。その語感からイメージが湧いて絵になることが多いです。私の絵は色で綴られた詩だと思う。テーマは四季。私は人々に喜びと、そこはかとない希望のようなものを胸に感じていただけるような絵を描きたいと思います。私自身が自然から習って創り出した世界での散歩を楽しんでほしい。色美しい風景を愛で、静かな雰囲気に心もやすらぎ、去った日の思い出を空想に浸る人、そして道ばたの目立たない小さな花にふと目をとめ、可憐ながら完全な美しさに感嘆の声を挙げる人。私はそんな姿を夢見ながら描いています。」

横井さんの俳画は難解なようで実にわかりやすい。それは彼女自身が感じたことを色彩と詩によって表現しているからだ。横井さんの芸術は彼女の生き方そのものであるため、芸術の知識や審美眼を持たなくても直感的に私達日本人の心に響く。またその情緒が海外でも高い評価を得ている。



薫風
2008年　エッグテンペラ　36×28.5cm
春の訪れを告げるような富士山は、横井照子富士美術館の開館にあわせ、描かれました。

横井照子 富士美術館

住所　〒417-0809　静岡県富士市中野464
Tel/Fax:0545-36-0470
毎週金・土・日曜日開館
※その他の日はお電話にてご相談ください。
開館時間／10:00～16:00
入館料500円(学生・子供無料)
駐車場有り